

上杉雅之(監)

杉元雅晴, 菅原 仁(編著)

イラストでわかる物理療法

評者 奈良 勲

広島大学名誉教授

本書は、医歯薬出版が発行している「イラストでわかるシリーズ」の1つ『イラストでわかる物理療法』である。通常、物理療法と称するなかには、水治療法、電気療法、などが含まれているが、本書はそれらを総称した名称である。これまでも物理療法の書籍は発行されているが、本書は主に学生や新人理学療法士を読者層としている。よって、第1章から15章で構成され、養成校の一学期の15回の授業に合わせて企画されている。本書では、総論、すべての物理的手段のエッセンス、定義と効果、治療目的、適応、禁忌、図を多用した具体的実施手順、症例、トピックス、先輩からのアドバイス、設問、そして病態生理の科学的基礎などが詳細に網羅されており、安全管理と疾患別物理療法の章もある。つまり、想像以上に複雑な物理療法の機序を特に初学者にはたいへん理解しやすく記述されている。

理学療法(physiotherapy: 英国, physical therapy: 米国)の歴史的起源は、古代ギリシャのヒポクラテスやいわゆる東洋医学などの自然界の物理的エネルギーを活用していたことに由来している。前者のphysiotherapyはphysiology(生理学)の接頭語が用いられているが、これは一般的治療原則のうち理学療法にも含まれている「刺激・誘導・補助・情報」であり、生体の望ましい生理学反射、反応、行為、行動を得るためである。一方、physicalの意味は正しく物理的治療手段を表している。双方の目的自体に相違はないが、治療手段を問わず治療機序を表すphysiotherapyの名称は、現在の理学療法の内容に合致していると考ええる。

さて、物理療法の歴史的変遷として主に痛み、循環不全、神経損傷などを呈する対象者に適応とされてきた。しかし、理学療法の対象が運動機能不全を呈する対象者に拡大してきたこともあり、「物理療法」が軽視? されてきた経緯がある。そして、理学療法

の1つの治療手段として、診療報酬との関係もあるが、物理療法はないがしろにされてきたことも事実であろう。それでも「日本物理療法学会」をはじめ、数は少ないと言えるが、褥瘡や他の病態に対する新たな知見も報告されていることに鑑み、たとえ運動機能不全を呈する対象者であれ、物理療法を併用することによって、より有効な理学療法の帰結が得られることの意義は多大であると考ええる。

私が広島大学医学部保健学科に勤務していたころ大学病院で体験した症例の1つだが、泌尿器講座の某教授が久しぶりに草野球でピッチャーをやった後に肩の痛みと可動域制限が生じたため、私に診て欲しいとの依頼があった。これは肩関節周囲組織の炎症と損傷(五十肩亜急性期)であったと診断された。私は「コッドマンの五十肩体操」ではなく寒冷や超音波療法、PNFの収縮・弛緩法、徒手療法を併用した。5日間の治療期間を予定していたところ、3日間の理学療法で完治したことに私自身も驚いた。某教授には治療手技の機序について説明したのは当然であるが、医師としても納得してもらっていたようであった。

本書は上記のごとく、初学者と新人理学療法士向けに物理療法の全貌を丁寧にわかりやすく記述してあることは高く評価したい。だが、「です・ます調」で丁寧過ぎると語尾が長くなり、もどかしいので、歯切れがよくない印象を受ける。さらに、「訓練」、「障害」などのネガティブと思える用語を国際生活機能分類に準じた用語に是正する努力を願いたい。

B5判・248頁、2色刷
定価：本体4,000円＋税
医歯薬出版刊、2019年